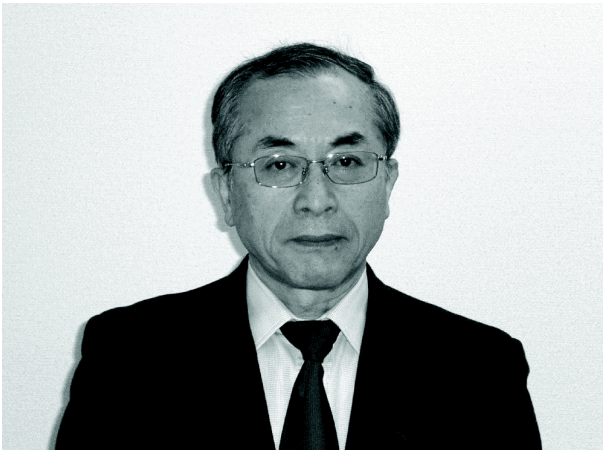


## 《インタビュー》

## 被災地のがれき処理、一時保管にコンテナの活用を

E F インターナショナル・中尾社長

コンテナの売買やリースなどの業務を手掛けるE F (エフ) インターナショナルの中尾治美社長は、東日本大震災の発生から1年が経過してもなお進まないがれき処理への対策として、一時保管に海上コンテナを活用することを提案している。中尾社長は、「何段にも積み上げることができ、必要に応じて海上輸送やトラック輸送で容易に移動することもできる」とコンテナ活用の優位性を強調。被災地の復旧・復興が停滞する中、「今からでも遅くない」との見解を示し、早急に検討するよう国に求めた。



## 〔コンテナの“第2の人生”をサポート〕

—御社の業務内容についてご紹介いただけますか。

「新造・中古コンテナの売買やリース、コンサルタント、コンテナ市況レポートの配信、海外コンテナ業者の国内代理店などが主な業務。当社は2010年3月に設立したが、そのきっかけは、船会社で使用されてリタイヤした後のコンテナの“第2の人生”の重要性に行き着いたこと。元々リース会社に勤めていたが、会社を辞めてみると視野が広がり、中古コンテナの方が改造などさまざまな使い方ができるようになるのではと考えるようになった」

「世界のコンテナは、3000万TEUを超え、ま

だ右肩上がりの状態。この傾向は、世界の貨物がすべてコンテナ化するまで続くと思っている。コンテナは通常、10年以上経過すると新造代替するが、船会社は荷主のために代替を進めて常に良い状態を保っているし、リース会社も同じ手法をとっている。そのため、コンスタントにリタイヤしたコンテナが出てくることになる。現在は円高で厳しい経済状況が続いているが、その中でもコンテナの“第2の人生”の需要はまだまだあると確信している」

## 〔海上コンテナはがれきの一時保管に最適〕

—中尾社長は被災地のがれきの一時保管に海上コンテナの活用を提案されていますね。

「震災からすでに1年が経過しているが、岩手、宮城、福島の3県から出た2200万トンを超えるがれきはいまだにそのほとんどが残ったままの状態。積み上げられたがれきは壁のようにそびえ、あのまま放置しては何も建てることができず、復旧・復興が一向に進まない。また、被災地の人々が元気を取り戻すためにも、がれきをそのままにしておくのは好ましいことではないと感じている」

「そこで、海上コンテナへのがれきの一時保管を提案した。20フィート型のコンテナは28トンが積載可能だが、中古コンテナを使用することを想定しても、2トンのフレコンバッグで10個は積むことができるだろう。がれきをコンテナに詰め込み、安全な場所を確保すれば、何段かに積み上げることもでき、土地の有効活用にもつながる。また、コンテナであれば、必要に応じて海上輸送やトラック輸送で容易に移動することができるだけでなく、がれき処理が終わった後に売却して差額を取り戻せる可能性もあり、大きなメリットがあると言える」

「現在では、がれきの広域処理に関して引き受け先の問題が見受けられるが、コンテナに一時保管していれば、受け入れ先が決定した段階で移動させるだけで済む。東京都は、コンテナを特別発注してがれきを運搬しているが、それでは余計なコストがかかってしまう。私は既存のコンテナでも十分対応できると考えている。今からでも遅くはないので、国はコンテナの活用を早急に検討すべきではないか」

#### 〔邦船社は国際的なリーダーシップ発揮を〕

―大手アライアンス再編の動きをどのようにみていらっしゃいますか。

「現在のコンテナ船市場は、マースクが25%のシェアを持ち、全世界を牛耳っている。同社が運賃を下げると他社が追随せざるを得なくなり、全体の運賃が下がるという状況。そういう中で、他社は寄港地などサービスの内容でマースクとの違いを出していく必要があり、そのためにアライアンスを組んで対抗していくほかない。コンテナは非常に画期的な輸送システムだが、ここまで仕上げたのは日本の船会社。邦船社はその誇りを胸に、知恵を出し合ってがんばって欲

しい」

―今後、邦船社にはどのような取り組みが必要になるとお考えですか。

「例えば、邦船社は2002年に設立された『コンテナ・オーナーズ・アソシエーション(COA)』のメンバーに入っていない。同会議には、大手船社やコンテナリース会社などが参加しており、さまざまな情報を手にすることができる。また、COAの中では、あらゆる課題に対して、検討を重ねて規則作りを進めており、いずれグローバル・スタンダードになっていくだろうと思っている。邦船社には、こうした国際的な会議に出席してリーダーシップを発揮して欲しいと感じる。規則ができあがってから変えるのは難しいが、最初から入って提案していければ、自分たちの基準にあった規則作りをリードすることができるはずだ」

#### 〔今後はアイデア溢れるコンテナの時代に〕

―最後に、これからのコンテナの展開についてお聞かせください。

「当社は韓国のFBC社(Future Box Corporation)の代理店をしているが、同社ではスライディング・ドアやハイブリッド・オープン・トップの特許を取得している。例えば、通常の観音開きのコンテナは容易に開けることができるが、スライディング・ドアは2枚扉となっていてヒンジ(蝶番)が内側にあるため、ドアに細工できないようになっている。コンテナは、20フィート型、40フィート型と仕様は同じだが、その中で今後はいろいろなアイデアの物が出てくると期待している」

―ありがとうございました。(聞き手 増山泰央、石川謙吾)